

自前の発想で来世紀の森林研究を

四国支所長 佐々朋幸

人類が地球史に出現して以来、人類は常に自然の脅威と闘いながら、そのつど獲得した知識と技術によって自然を大いに利用し、無条件で多くの恩恵に浴し続けてきました。こうした中で、近代社会の大量生産/大量消費がもたらす地球環境への弊害が露呈された結果、今や人類の社会・経済活動を大幅に抑制すべしとの意見が大勢を占めつつあります。しかし、これまでの歴史の流れから見て、人類の社会・経済活動が今日以上に活発化することを誰も否定できないでしょう。そうなれば、まもなく地球が本来の自然の姿から外れた振る舞いを強いられることは容易に想像されるところです。そこで今、人類が考えなければならないことは、ただ在り来たり自然に憧れ、人間－自然の調和の乱れを非難するのではなく、自らの生存と福祉を求めながら同時にその生存基盤を崩さぬよう、許される範囲でいかにして地球上の自然を活用していくかについてなのです。要するに、人類社会が地球の自然との間に新しい関係を構築していける、新たな発想に基づいた科学が求められているのです。



そうした状況下にあって、地球環境問題の主演として森林に注目が集まっている現在、当然のことながら、我々森林研究者にも専門家としてこの問題と取り組むための独創的な発想が要求されてくることとなります。ところが、日本人には明治時代以降の習性がいまだに残っているらしく、往々にして欧米からの発想を鵜呑みにし、それらをやたらと使いたがる癖があるように見えてならないのです。同じことは別の面からいえます。今ここに、素晴らしい発想（方法論）から優れた研究成果を挙げた科学者X氏がいます。すると、最終的な研究目的が異なっているものにまでX氏の手法をそのまま拝借し、結果として新規性に乏しい報告をして満足しているなどはその一例といえましょう。X氏は研究者として明確な目標を立て、それ以前の研究実績を徹底的に洗い出した後に、悩みながらも、問題の解決に最も相応しい方法論を導き、それに基づく追究に当たったからこそ素晴らしい研究成果が生まれ、権威として認められるに至ったことを忘れてはならないのです。つまり、課題ごとの本質を研究者自身の目で見極め、各自の機略に富んだ発想で研究に臨むことこそが必要なのです。

曲がりなりにも衣食住足りて豊かに暮らし、浪花節的な暖かな情緒で包まれている日本社会にあっては、もともと思考の深みに限界があり、その時々々の雰囲気流されてしまう傾向が極めて強いように思われます。しかし、現在のように技術の進歩が速く、多様で、かつ価値観がはっきりしない時代では、何もしないでいると、もちろん取り残される。そこで、何でもかんでも周囲と同じにやろうとすると、時間と資源を浪費するばかりで結局魅力的な仕事はできないし、第一本人も面白くない。このような時代であるからこそ、目先のことにとらわれず、数十年後の地球上で人類社会や森林がどうなっているかの長期的視点に立った森林の将来像を描き、その実現に向けて戦略的な攻略術を練ることが森林研究の専門家たる私達に期待されているのです。その際、私達に使用を許される武器が、専門家としての豊かな経験と知識を基に、研究者自身によって生み出される「自前の発想」なのです。